

立教大学学術推進特別重点資金(立教 S F R)
 大学院生研究
 2005年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学	研究科	史学専攻
指導教員	所属・職名		氏名			
	文学部・教授		栗屋 憲太郎 印			
自然・人文の別	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	1名
研究課題名	1930年代における宮中勢力の政治動向					
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科史学専攻後期課程5年		茶谷 誠一 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名			
	文学研究科史学専攻後期課程5年		茶谷 誠一			
研究期間	2005年度					
研究経費	200 千円					

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、戦前の天皇制国家に関する研究分野であり、とくに昭和期の1930年代を対象時期に設定し、政治体制の変動に焦点をあてた研究である。

1930年代は、ロンドン海軍軍縮条約の批准問題や満州事変から日中戦争へと、戦前日本の転換期となった時期である。この激動期において天皇、宮中勢力がどのような政治思想を有し、具体的にどう対応したのかを明らかにする。そのなかで、政党内閣制の興隆から崩壊、挙国一致内閣、軍部主導内閣へと政治体制が変化していくなかで、明治憲法における統治権の総攬者である天皇と彼を支える元老西園寺公望や牧野伸顕内大臣らをはじめとする宮中勢力がどう関与していたのかという点に注目して、分析をすすめていく。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[天皇制] [宮中グループ] [ファシズム]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

研究概要にそい、1930年代における宮中勢力の政治動向に関する分析を進めた。

そのなかで、まずは昭和初期以来、昭和天皇を支えてきた牧野伸顕内大臣を中心とする宮中勢力の実態、おもに彼らの政治的活動の背景にある政治思想や行動様式を解明することを分析視角とした。具体的な対象として、従来の先行研究で本格的な分析がなされてこなかった、関屋貞三郎を取り上げた。関屋は1921年3月から1933年2月までの約12年間もの間、宮内次官に在職し、牧野内大臣、一木喜徳郎宮内大臣、珍田捨巳(鈴木貫太郎侍従長)、河井弥八侍従次長らとともに、宮中勢力の主要構成員として活動してきた。しかしながら、従来の研究でも論じられてきたように、田中義一内閣から犬養毅内閣までの政党内閣制の時代において、宮中勢力の政治関与の実態が明らかにされてきたものの、そこでは、関屋を除くメンバーの言動が中心であり、関屋に関する言及といえ、宮内次官としての宮中職務に限定され、関屋の政治的言動は等閑視されてきた感が否めなかった。そこで、私は、関屋貞三郎の政治的言動を分析するため、おもに国会図書館憲政資料室寄託の「関屋貞三郎文書」を中心資料として、論文を作成し、「関屋貞三郎の政治思想と政治活動—牧野グループ理解への一考—」というタイトルで、『史苑』第66巻第1号(2005年11月発行)に発表した。本論文で解明したことは、以下の通りである。

1. 宮中職務以外では、松岡洋右や南次郎などの旧友や心酔する思想家の安岡正篤と深い関係を持ち、政党政治批判や「満州国」育成論など、自身の政治思想を披瀝していた。
2. 天皇の政治意思を政局に反映させるために政治関与を行っていた牧野内大臣と政治思想を共有しながら、牧野の政治活動を裏面から支え、関係者との意見交換、調整などに奔走し、牧野の政治活動を補完する役割を負っていた。
3. 宮内次官辞任後に本格化する講演活動を全国各地を飛び回って実施し、天皇や皇后の公私両面を民衆に紹介し、天皇制における支配・被支配の紐帯関係の強化に努めていた。

以上の解明点をまとめ、本論分の結論として、関屋の政治的活動は、牧野グループの活動全体にとり、重要な一翼を担っていたということである。政治思想面での、英米協調外交の維持、国内政治の危機に対する対処法としての政党内閣制への批判的見方と天皇親政強化路線(重臣起用による立憲君主制再編)などは、いずれも牧野内大臣の政治思想と合致するものであった。よって、牧野と政治思想を共有することで、望むべく政治体制に向けた行動理念が形成され、牧野と共同歩調をとり、政治の裏面での積極的な政治活動に励んだのである。しかし、関屋の政治的活動は、宮中勢力全体への軍部、右翼勢力による側近攻撃に加え、政府や他の政治勢力からも批判的にみられていた。宮中勢力内部では、木戸幸一内大臣秘書官長や近衛文麿、原田熊雄ら次代を担う「宮中革新派」が、牧野を含めた上層部の一新を思案し、関屋の宮内次官更迭も考慮するようになる。宮中勢力内部からの転換論に加え、右翼勢力など外部からの側近攻撃の激化もあり、関屋は1933年2月に、一木宮相とともに辞任することになる。関屋の辞任は、牧野が宮中勢力での主導権を低下させていく、大きな要因となった。

次に、2.26事件後の宮中勢力に関する研究もすすめた。2.26事件で襲撃を受けた宮中官僚は、その後の建て直しにより、湯浅倉平内大臣、松平恒雄宮内大臣、百武三郎侍従長という新布陣が形成された。3人を中心とする新体制は、湯浅が1940年5月に辞任するまで続いていく。本研究では、この1936年から1940年までの期間における3人の言動を分析しながら、政局との関係を論じていくことにした。今年度までに論文という形式で完成、発表するにはいたらなかったが、現時点までの研究経過と研究成果を以下にあげておく。

研究成果の概要 つづき

研究経過としては、先行研究の整理、資料収集と分析という前提作業に時間を費やした。当該期の先行研究は、数多く存在するものの、日中戦争や日独伊三国同盟、日米、日英関係論などの外交史からのアプローチか、新体制運動や大政翼賛会成立などの国内ファシズム体制の確立という視点からの研究が中心であり、宮中勢力の動向に着目した研究は少ない状況にある。その理由は、資料面での制約である。1930年代前半の牧野内大臣時代と比較すると、湯浅内大臣、松平宮相、百武侍従長の3人とも日記や書簡などの関係文書が皆無か極端に少なく、『木戸幸一日記』、『西園寺公と政局』からの情報も、木戸が宗秩寮総裁専任となり、閣僚として宮中から去ることで情報量が低下し、原田も、閣僚からの情報量が減少する傾向にある。この資料的な制約により、原田との情報交換を行っていた湯浅はまだしも、松平宮相と百武侍従長の言動は、研究対象にならないほどの希薄な状況にあるといえる。よって、私は、宮中関係者のほか、当該期の政治家やジャーナリストをはじめ、彼らと接触のあった人々の日記や書簡、回想類を丹念に調査し、そこから湯浅、松平、百武の言動を拾い集めている。さらに、英米の外交文書である、「Documents on British Foreign Policy 1919-1939」、「Foreign Relations of the United States」も調査し、外務官僚として、駐英大使、駐米大使の前歴のある松平宮相の英米外交官との会見などを記録した文書を収集して分析している。

分析視角は、湯浅内大臣を中心とする宮中勢力が、1940年の三国同盟締結や大政翼賛会成立までのファシズム化進行の時期に、抵抗しうる大きな役割を果たすことができなかつた理由を探ることである。三国同盟締結にいたるまでの過程が格好の例であるが、国内の政治勢力では、推進派の陸軍のほか、昭和天皇や元老西園寺、湯浅内大臣ら宮中勢力、海軍上層部などが独伊との提携に消極的であったにもかかわらず、最終的には三国同盟を締結してしまう。従来から指摘されてきたように、この時期の日本の外交政策の決定には、第2次世界大戦の戦局の転換やドイツ、ソ連などの国際政治の変化などの側面に大きな影響を受けていたことは確かである。しかし、国内に目を向けると、宮中勢力で主要な地位にいた湯浅、松平、百武の3人ともが、程度の差はあれ、昭和天皇と英米協調外交維持という政治思想を共有していたにもかかわらず、牧野時代のような政治的協議も交わさずに、目立った抵抗もないまま、ファシズム化に身を委ねる格好となってしまう。その要因、理由は何かという点を解明していくことが本研究のねらいであり、今後の論文作成での課題となる。